

V 第8回鯨に関する座談会

主 催 水産海洋研究会

主 題 1966/67年度南極洋捕鯨操業並びに資源漁場調査について

日 時 昭和42年6月8日 1300-1700

場 所 東京水産大学漁業学科第4演習室

コンピーナー 奈 須 敬 二 (東海区水産研究所)

話題および話題提供者

- | | |
|----------------|-----------------------------------|
| 1) 操 業 関 係 | 飯田陸之助(極洋捕鯨株式会社) |
| 2) 気 象 関 係 | 馬場 邦彦(日本水産株式会社) |
| 3) 鯨体の生物調査 | 正木 康昭(東海区水産研究所) |
| 4) 海鰐丸による調査 | 小沢敬次郎(東京水産大学)
代読 石野 誠 (東京水産大学) |
| 5) 第5千代田丸による調査 | 奈須 敬二(東海区水産研究所) |
| 6) 総合討論 | |

1 操 業 関 係

飯田陸之助(極洋捕鯨株式会社)

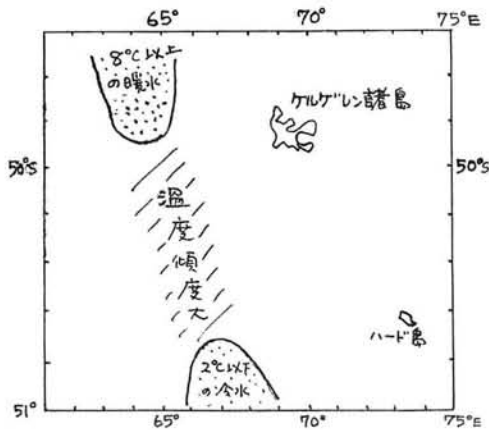
近年約10年間に至る漁場を眺めると、第11次南鯨(1956/57年度漁期)以降、太平洋域から西へ移動し、第14次(1959/60)ではロス海と東経80度(インド洋域)の海域に分かれて操業した。第16次(1961/62)以降の漁場は、東経60度付近がその中心となり、第17次(1962/63)には東経25度そして18次以降は更に西方のフォークランド諸島周辺からサウス・ジョージア島周辺まで移動した。今漁期(1966/67)は、経度0度から東経90度の範囲で操業が実施された。

漁期前の調査で、フォークランド諸島周辺において約300頭程度のイワンクジラを発見したが、気象条件が悪いため操業見通しが立たず、気象条件の良い20°~30°E付近で操業を開始した。中心域になつた25°Eの40°~41°S付近におけるイワンクジラの分布は比較的狭く、発見鯨の50%以上は40°以北に分布していた。従つて、操業開始後は漸次東へ移動し、マリオン・クローゼット島付近からケルゲレン諸島周辺にまで達した。

ケルゲレン諸島西側には、2°C程度の冷水域が分布し、その西方に8°C以上の暖水塊が南下して、温度傾度の大きい海域が形成されていた。

漁期の進行に従つて、漁場のつながりを求めて移動し90°E付近まで達した。

主漁場の一つであるクローゼット島周辺の特徴としては、せいぜい2週間程度の操業しか出来ないフォークランド海域に比較して、長く操業が出来ることであり、インド洋域ではクロー



第1図 ケルゲレン諸島西側海域の表面水温概況。

セット付近がイワンクジラの集まる海域ではないかと考えられる。

30°E 付近では舌状形を呈した暖水塊が南下し、その先端付近(15°~17°C)に殆んど親仔連れから形成されたイワンクジラ群が分布していた。

次に鯨の特徴は、ケルゲレン付近では捕獲鯨の約75%がオスで、鯨体は大型が多くまたその南東海域では逆に約75%がメスで占められており、その65%が妊娠していた。更に、こ

これらの海域では産油量が最高に達し、シロナガス換算一頭当り30~35トンが記録された。

なお同海域で、64~5フィート程度のナガスクジラが分布し、40~70°E 付近で68~75フィートからなる大型ナガスクジラ群が発見された。

また、80°E 付近に多量に分布していた60フィート以下の小型ナガスクジラ群は、近年同鯨種の捕獲数の減少に起因した一現象とも受け取り度いが、早計の感もする。しかし、今年度の発見結果から、ナガスクジラの資源は増加しているように感じられた。

次に、CPU Eを用いた資源診断について若干述べると、近年の操業形態は捕獲優先から生産向上へと変つて来ている。例えば、最近における極洋船団の捕獲状況をみると、次の表で分るように、捕獲対象鯨種および、操業様式が変化して来ている。特に、今漁期(1966/67)においては、可能な限り生産歩留り向上に努力したため捕獲制限が頻繁に実施された。従がつて、CPU Eを用いる場合には、捕獲制限を行なつた回数補正をしなければならない。

(文献：奈須敬二)

18南鯨(1963/64)	ナガスクジラの捕獲制限がなされた。
19"(1964/65)	主たる捕獲対象鯨種がナガスクジラからイワンクジラに移つた。
20"(1965/66)	イワンクジラの捕獲数を制限した。
21"(1966/67)	イワンクジラから最高の生産高を得るための捕獲制限がなされた。